

昭和五十二年七月二十五日(月)～同三十日(土)

国文学研究資料館開館特別展示目錄

— 国学者自筆稿本と奈良絵本を中心として —

国文学研究資料館

国文学研究資料館はわが国ではじめて設立された日本古典の研究資料センターです。多くの方々から開館の日を待望されていましたが、今般ようやく当館の施設を公開し利用していただけることになりました。

当館の事業の中心は現在残っている明治以前の日本古典籍のすべてを国内はもちろん海外にまで及んで調査し、所蔵者の許可あるものをマイクロフィルムに撮影し、ひろく研究者ならびに古典を愛好する人々の閲覧に供することにあります。

私達の祖先の心を表現した貴重な文献資料は火災や水害、虫害によって年々その数を減じています。また現存する資料も各地に散在していて、その全体を展望し、必要な資料を閲覧することは容易なことではありません。

当館はこれらの全資料のマイクロ化をはかりわが国の文化財の保護にあたると共にこれを利用者に開放し、祖先の文化遺産を後代に伝えるよう努めるものであります。

今回、開館特別展示として国学者自筆稿本と奈良絵本また当館の貴重書中から二三の資料を選んで第一回の展示会を試みることにしました。

展示会是一般公開とし、当館の諸活動の一環として今後とも継続して行います。なお国学者自筆稿本は国立教育研究所から当館に移管されたものを主とし、奈良絵本は当館所蔵ならびに東京大学国文学研究室よりの出品です。解説は当館展示委員会委員長大久保正以下各教官が分担執筆しました。

昭和五十二年七月二十五日

第一 国学者自筆稿本

1 今井似閑 書置之事 自筆一卷

今井似閑（一六五七—一七二三）は、三手文庫本大黒屋本の集書家で、契沖の弟子である。彼の文事を支えたのは、京都代々の両替商大黒屋の富であつた。長兄次兄の頃から傾いた家運を盛り返えした彼は、四十歳前に隠退、六十七歳で没するまで、古典研究を専らとした。この一卷は、死去二年前に書かれ、善四郎、お俊、太郎右衛門に与えたものである。円徳以来の家名相続が彼にとつてもっとも大きな関心事であつた。文中、古典学に関することがほとんど見えない。この書置は九月八日の日付であるが、先立つこと二ヶ月、七月廿日上賀茂神社へ蔵書を奉納している。六十五歳の似閑は、命終の近きを覚悟して、文事にも俗事にもきまりをつけようとしたものであろう。

2 度会（久志本）常彰 和国魂 自筆稿本三卷三冊

『日本国風』の著者度会常彰（一六七五—一七五二）の著、享保二十一（一七三六）年自序。この序文の文章は、ほとんどそのままに『日本国風』で用いられており、きわめて明確な国家意識の宣揚をみることができる。しかし、本書は單純に『日本国風』の準備稿ないし草稿本とはいえない。『国風』が日本百科の観があることに對して、本書は、問題を神道とその周辺に絞っている。その点、神道学者としての著者の思想は、本書に、より明瞭にみられるといいえよう。

3 度会（久志本）常彰 日本国風^{やまとくにぶり} 自筆稿本六卷六冊

度会常彰は、伊勢国豊受大神宮の祢宜で、神道学者であつた。著述は極めて多い。延享五（一七四八）年自序の本書は自著『和国魂』を享け、日本の古習俗、故事等の由来を古書に求めたもの、世事習俗の百般にその目は及んで、およそ三

百四十項、早い日本論ともいふべきであろう。引用書は古今にわたっている。

4 市左衛門宛賀茂真淵書簡 自筆一卷

賀茂真淵（一六九七—一七六九）から真淵の実子で、浜松宿の脇本陣梅谷家を継いだ市左衛門真滋にあてたもの。年代未詳。親族の安否や自分の健康のことを記し、歳暮の心配りなどをこまごまと書き、肉親へのこまやかな情があふれていて、真淵の私生活の一端に触れることができる。文中の「小次郎様」とは田安宗武の世子。「御用甚重り」というのも田安家御用のことであろう。宝暦十三年正月十七日付書簡と内容が似ている。

5 本居宣長 十六番歌合判詞 自筆稿本一冊

本居宣長（一七三〇—一八〇一）は伊勢国松坂の人で、国学の大成者としてあまりにも有名である。和歌・歌学を国学の階梯として重んじ、歌合の判詞も多く伝わるが、本書は門人の示した十六番の歌合に、自筆の判詞を別に書記して贈ったものと思われ、もと半紙判の楮紙に記されてあったものを美濃紙の台紙に貼り、改装したものである。奥に「此歌合巻よき歌共おほく見え候て、いとうれしく候也。古人の入候故歟。もし今の人々の歌にても候はゞ、御稽古の御たゆみ候はぬしるしとおぼえ候て、愚老も殊によろこび候事也」とある。これによれば、歌合本文に作者は記されていないの遺憾であるものの如く、宣長も古人の作か、今人の作か判断しかねたようである。判詞のみで歌合の歌詞が伝わらないのは遺憾であるが、宣長が判詞のみを別冊に記したものは他に例が無く、珍しい資料である。奥に、「此書明治廿八年十二月三十日本居秋屋先生所惠送也」とあるが、秋屋は本居豊穎（一八三四—一九一三）の号で、本居大平の家系に伝来したものである。或いは、宣長が大平に書贈ったものであったかとも思われる。

6 荒木田尚賢宛本居宣長書簡 自筆一卷

本居宣長（一七三〇—一八〇一）が、安永五年（一七七六）七月三日、伊勢内宮の神官荒木田尚賢に宛てて出した書簡である。尚賢は同国津の神道家谷川士清の門に学び、その女婿となった人。賀茂真淵の教を受けたこともあり、宣長と親

交があったが、この書簡の執筆時はまだ鈴屋に入門はしていず、入門したのは天明七年（一七八七）に至ってからである。本書簡は長文で、古語の考証その他学問的内容に富み、宣長と尚賢の交渉を見る上にも注目すべきものである。文学も典型的な宣長の字体で丁寧に記載されており、保存も良好である。釈文、及びその内容についての考証は、本館紀要第一号（昭和五十年三月刊）に詳細である。

7 稲葉通邦 神祇秘抄 手写本一冊

稲葉通邦（一七四四—一八〇一）は尾張藩士。武技・礼法を学び、律令の学に精しかったが、寛政元年（一七八九）には本居宣長に入門している。河村秀根と共に尾張敬公の編に成る『神祇宝典』『類聚六国史』の校合に従事したほか、大須真福寺所蔵の将門記（現国宝）を発見した人としても有名である。本書も真福寺所蔵の古巻を天明六年（一七八六）十一月にみずから影写した一冊で、巻末に考証が記されている。

8 富士谷御杖 脚結変例 自筆稿本一冊

富士谷御杖（一七六八—一八二三）は国語学者富士谷成章の子で、父の語学説を承け、家学を相承しつつ、伯父の儒学者皆川淇園の学風の影響をも受けて独自の歌学説を形成した国学者で、語学的研究はその学問の出発点をなしている。本書の成立年代は不明であり、御杖の署名もないが、御杖の自筆である。脚結（助詞の類）の用例で通常と異なる例歌を列挙した覚書ともいふべき未定の稿本で、『脚結抄翼』と同様、初期の稿と思われる。

9 富士谷御杖 開国論 自筆稿本一冊

本居宣長と並ぶ江戸時代の国語学者富士谷成章の子で、宣長を批判し、独自の言靈説により古典を解釈して『古事記燈』『万葉集燈』を著わした富士谷御杖が、神典にもとづく処世の方途を論じた未定稿の自筆稿本。開国とは、神典の教に眼を開いて、『隠身』の道理により世に処することであると御杖は説く。昭和十一年刊『富士谷御杖集』第二巻に翻刻されたものの原本。

10 富士谷御杖 脚結抄翼 自筆稿本二卷一冊

『脚結抄』は父の成章の名著で、書名は『脚結抄』の補翼の意を表す。脚結抄の巻一及び巻二の初め数条の注解の稿を一冊に綴じたもの。まず各条の脚結の意味・用法を概説し、次に『脚結抄』に掲げる例歌について、具体的にその意味を解説する。御杖二十七歳の寛政六年（一七九四）前後の稿と推定され、御杖の歌学説成立以前の脚結研究の一端を示すものとして、御杖の学説の展開を考察する上に、重要な意義をもつ。表紙には、「脚結翼草稿」と墨書するが、内題には「脚結抄翼」とあり、「北辺二世富士谷成寿述」の署名がある。第二巻は書きさしのままとされており、未定稿である。昭和十五年刊『富士谷御杖集』第五卷所収。

11 富士谷御杖 百人一首燈 自筆稿本一冊

富士谷御杖が独自の歌学説の立場から著した百人一首の注釈で、「おほむね」と歌の釈義とから成るが、語句そのものの注釈は極めて少く、歌の傍に俚言を添えた程度で、もっぱら歌の詠まれた環境や事情を説明し、著者独自の表現論を主張することを主眼としている。文化元年（一八〇四）刊本の原本であるが、「おほむね」を欠き、第八十一の後徳大寺左大臣の歌までしか存しない。本文も刊本とは相違するところが多く、刊本に至る学問体系の進展が窺われる。昭和十二年刊『富士谷御杖集』第二卷所収。

12 富士谷御杖 神典挙要 自筆稿本一冊

富士谷御杖が本居宣長の『古事記伝』に對抗して著した『古事記燈』の外篇と言うべき書の一つ。『古事記燈』の稿本中もつとも遅くなったと思われる『古事記燈神典』（文化十四・一八一七年起筆）と同じく「中臣御杖著」と署名しており、これと前後して成った書か。はじめに神典に示された神道の大意を概説し、以下古事記国生みの各条を挙げてその要旨を説く。未定の草稿本であるが、御杖晩年の作業として注目に値する。昭和十二年刊『富士谷御杖集』所収。

13 新庄道雄 後輶軒小録 自筆稿本一冊

新庄道雄（一七七六—一八三五）は駿河国府中の人で、平田篤胤門の逸材。栢園（苑）と号した。本書はその隨筆で、伊藤東涯の隨筆『輶軒小録』に倣った題名を付し、みずから見聞したさまさまの事柄を四十六項に分類して記したものである。表紙に「天保四年八月廿八日稿成」とあり、晩年五十八歳の秋に成ったものである。表紙に「栢苑漫筆一」とあり、巻首に「二階廼屋藏書之印」の印記がある。「二階廼屋」は道雄の家号である。

14 成島司直 晃山廬從私記 自筆稿本一冊

成島司直（一七七八—一八六二）の著。成島家は代々の幕臣、儒者であった。和漢の典籍に通じ、將軍家慶の寵遇を受け、しきりに栄達、諸大夫図書頭となった。文化六年『御実記』（『徳川実記』）の編纂を命じられ、司直の家をその事業所とし、よく努めて嘉永二年（一八四九）成立した。林述斎はその総裁であった。本書は天保十四年（一八四三）將軍家慶の日光参拝の供奉記録で達意の和文で綴られている。序者は林述斎である。

15 橘守部 歴朝神異例 自筆稿本七冊

橘守部（一七八一—一八四九）は伊勢国に生れ、十七歳で江戸に出、ほとんど独学で一家を成した特異な国学者で、本居宣長の説に対抗した。本書は、古来の神々の靈威を諸書から抜粹し、これを類別して、靈異についての見解を記したもので、守部の神秘観を見ることができ、天保十四年（一八四三）の自序があり、この頃の成稿と思われる。守部の文庫「椎本文庫」の印記があり、自筆原本として貴重である。大正十年刊『橘守部全集』第六卷所収。

16 橘守部 旧事記直日 自筆稿本六冊

聖徳太子の撰と伝える旧事記（先代旧事本紀）が平安朝の偽撰であることは、江戸時代すでに明らかにされたところで、今日の常識であるが、守部は本書の原形は奈良朝末に、神祇にあずかる何人かが諸家の古記録の残篇を集録したもので、それを平安朝に補綴し、聖徳太子撰の旧事本紀と誇称するに至ったものが現存流布の本であるとし、流布本の本文を篩い

分けて、奈良朝撰の原本を復元しようと試みたもので、ここにも旧事記の偽書であることを力説した本居宣長への対抗意識が窺われる。苦心の作ではあるが、その試みは成功しているとは言いがたい。本書は「椎本文庫」の印記を有し、守部自筆の清書本として、定本とするに足りる。序によれば守部六十七歳の弘化四年（一八四七）の成稿である。

17 福田美楯 詠草集 自筆稿本二十三冊

福田美楯（一七八九—一八五〇）は富士谷御杖（一七六八—一八二三）の子。幸舎と号し、家学を承けて門人に講説した。本書はその自筆詠草で、外題に「詠草」「詠藻」と自筆で墨書し、あわせて冊ごとに干支・年号を記すが、第二十三冊は飛鳥井家出題の組題詠草である。三十九歳より六十二歳（没年）に至る二十四年間の詠草の大部分を伝え貴重であるが、詠風は型の如き堂上風で、特色は認められない。

18 山川正宣 文政大嘗会次第 自筆稿本一冊

山川正宣（一七九〇—一八六三）は、摂津国（大阪府）池田の人、代々の酒造家であったが、賀茂季鷹に古典の学を学んだ。学風は着実で、考証に長じていた。『山陵考略』『姫島考』『山川正宣家集』等の著述がある。本書は、仁孝天皇の文政元年（文化十五・一八一八）に举行された大嘗会の次第の忠実な記録である。

19 五十嵐篤好 〔雑著〕 自筆稿本一冊

五十嵐篤好（一七九三—一八六一）は越中国礪波郡内島村の人で、三十歳で富士谷御杖に入門、師の言霊説を承けて地方の国学者として重きを成し、金沢で没した。『湯津爪櫛』『伊勢物語披雲』『蜻蛉日記解環旅寝』など著述も多い。本書は表紙に「杜鵑花園叢書第二十八・第三十七集」とあり、杜鵑花園は篤好の号で、雑録を集めた一冊。「歌占考」「西籍概論を読む」など、自らの執筆にかかる数篇のほか、「鈴屋集」「詞の玉の緒」等、篤好の抄録にかかるものも多い。

20 五十嵐篤好 名言結本末 自筆稿本一冊

「聞く」と「聞かす」、「遊ぶ」と「遊び」、「めづる」と「めづらし」など、語原を同じくする語の本末（親子関係）

を論じた内容。京都の国学者鎌田昌言のもとに送って批評を乞うたもので、昌言の評言は帖紙して朱で書込まれている。この自筆稿本の浄書本がかつて東大附属図書館に蔵されていた由であるが、現在所在不明。富山県立図書館、戸出町立図書館にそれぞれ一本を蔵する。

21 五十嵐篤好

嵐鎌問答書 自筆稿本一冊

五十嵐篤好と京都住の鎌田昌言との間に応酬された国学・国語学の論争を記したもの。弘化二年（一八四五）六月から翌三年十一月に至る四往復のうちの七通で、篤好の分は、墨減や書込みの多い乱雑なもので、下書きらしい。論争は月の御徳の事、善悪応報の事、三わけ（未然、現在、過去）三ふり（正、反、譬喩）の事、濁音の語感のことの四条をめぐって行なわれる。鎌田昌言の分も含めて篤好の自筆。

22 五十嵐篤好

以呂波正義伝 自筆稿本一冊

大和がな（片かな）の字母についての従来の謬説を批判し、すべて字音に基くものであることを証して、正しい字母を示す。また、後半を「書法規矩」と題して、筆法についての諸説を載せる。つまり前半は国語学（文字論）書で、後半は書道（入木道）論書である。巻末に「安政三丙辰年九月吉日 五十嵐孫作篤好（花押） 囧／牧田重兵衛殿」とある。墨朱二色を用い、大柄な字体で書き典雅である。

23

六人部是香

篇能玉籤 自筆稿本二冊

六人部是香（一八〇六—一八六三）は山城国乙訓郡向日神社の神官で、父と共に平田篤胤に学び、関西における平田派神道の棟梁と称せられた人。歌格の研究にすぐれ、『長歌玉琴』の著者として有名である。本書はその随筆を集めた書で、文学・国学・言霊等の諸項を論じ、また古語を考証している。安政二年（一八五五）の序を附して出版された板本の原本で、奥に「萬延元申年四月 勢州向明神神主 輯者蔵板主 六人部美濃守」及び「浄覚町売弘人 加賀屋善兵衛」と記されている。

24 堀秀成

出雲国造神賀詞文義考 自筆稿本一冊

堀秀成（一八一九—一八八七）は江戸の人。若くして国学に志し、本居春庭門下の俊秀富樫とがしりか広蔭の門に学んだ。維新後は大教宣布に尽し、教導職中の衆望を荷った。落合直文の師である。本書は延喜式所収の「出雲国造神賀詞」を古代無類の名文として、その文章の格を分析解明したもの。明治十一年八月二十八日起筆、同年九月三日の成稿である。

25 吉岡徳明

角組葦 自筆稿本六冊

吉岡徳明（一八二九—一八九八）は江戸の人。平田篤胤の著書を読んで天台宗の僧籍を脱し、平田派の国学者として一家を成し、明治維新後は太政官御用係を勤めた。その著『古事記伝略』は名著として名高い。本書は徳明がみずから編んだ選集で、明治二十二年の皇典講究所講演の筆記など、日本の建国を古典によって論じ、国学の立場を説いた論説六篇を収める。題名は古事記の創世神話に拠る。

第二 絵巻・奈良絵本・丹緑本

絵と詞とを交互に配列して巻物のかたちにした「絵巻」は、日本独特の絵入り本の形態として、平安時代末期から鎌倉時代にかけて発達したが、室町時代から戦国時代にいたり、その製作を支えてきた王朝貴族や寺社の財政的逼迫とともに衰退期をむかえた。それら在来の注文主を失った絵師たちや、詞書を書いていた下級貴族や僧侶たちは、新しい注文主として当時の新興階級である町衆や地方大名らの好みに応じて、室町時代物語（お伽草子）を主な題材として新しい傾向の作品を生みだした。ふつうこれらを奈良絵本とよんでいる。

奈良絵の名称の由来は明らかでない。奈良で産せられる奈良扇や赤膚焼の茶碗の絵柄と似ているところからの命名だとか、奈良の春日神社や東大寺の絵所や、絵屋町（現在の元林院町）の絵師が画いたからだとかの諸説があるが、直接には

おそらく明治時代の古書肆の俗称が起源であろうとされている。

奈良絵本の最も初期の形の一つには、縦十五センチから二十センチまでの、民芸風の素朴な泥絵を画いた「小型絵巻」がある。後にこれを横長の冊子の形にたんで、紙も泥間どま似合紙にあい（襖の表に用いるような、粉っぽいやや灰色を帯びた紙）を使い、画の天地に水色の定形のすや・霞がすみ（横にたなびく雲の形）をつけたのが、典型的な奈良絵本である。これらには受注生産品だけでなく、後（江戸時代前期）には書肆の仕入れ本（店頭販売品）として多量生産されたものがあり、絵柄も簡略化類型化され、粗製のものが多い。一方、かつての大型絵巻（縦三十センチ以上）を冊子化した縦本の奈良絵本も、小形本の初期と重なる時期、すなわち室町時代末期から江戸初期に生産された。民芸風のものもあるが、土佐派ふうの華麗細密な画風のもが多く、すやり霞に金銀砂子を散らした豪華なものである。これも後には横本に吸収される。

一方、江戸時代初期、元和・寛永ごろから奈良絵本にならって仮名草子や浄瑠璃本などの挿絵に手彩色した木版本が生産された。主に丹（朱色）と緑（ほかに、奈良絵でよく用いられる金箔の代りに黄色、他に茶、紫など）を使用するので丹緑本にろうけんという。

版画技法の発達や、庶民婦女子への需要層の拡大につれ、十七世紀中ごろから十八世紀初にかけ、奈良絵本は整版本にとつて代られ、丹緑本も姿を消す。あたかもその過渡期にあらわれたのが、奈良絵横本をまねて印行された絵入整版の横本『御祝言御伽文庫』二十三篇（大阪、渋川清右衛門版）であった。室町時代の短篇の物語を「御伽草子」と称するのは、このシリーズにもとづくのである。

26 竹取物語絵巻 三軸 東京大学国文学研究室蔵

巻末には、「慶安己丑如月、琦山老侯命土佐広通・広澄父子画竹取物語図絵、同庚寅晩冬自曼珠院宮詞書完了、令知恭敬拝受了」との識語が付される。慶安三年（一六五〇）二月、琦山老侯の命により住吉如慶（広通）・具慶（広澄）親子

が絵を、同年十二月には曼珠院宮良尚が詞書を染筆したという。広通は土佐光吉の次子、光則の弟、後西院の勅命により住吉を名告る。寛文十年没、七十二歳。上中下巻各六図。

27 熊野の本地 二軸（本文・絵各一軸） 東京大学国文学研究室蔵

印度摩訶陀国の善哉王、五衰殿女御とその王子を主人公とする熊野権現の前生苦難物語。本文は江戸初期写。全十九図。元和八年識語の三巻本（天理図書館蔵）と同系統で、冒頭の本地を語る姿勢の記述に関しては、後の丹緑本にのみ踏襲されていくが、全般的に諸伝本の中でも独自で古態を有している。絵柄は古雅にして、室町末期から江戸初期にかけてのもので、後世の画一的な奈良絵にくずれていく以前のものである。本文と絵との別軸仕立は、物語を聞きながら絵面を見るという、当時の物語の享受の様相をうかがわせてくれるものでもある。（当館撮影済、紙焼E 910）

（28～30） 八幡宮縁起（三種）

平安時代初から中近世にかけて宇佐八幡や石清水八幡などの八幡信仰が盛行したが、それにともない、八幡縁起や託宣記が数多く作成された。それらは他の神社縁起に比して変化に富むことを特徴とするが、ここに展示するのは室町物語化した三点である。内容は八幡の祭神応神天皇の母神功皇后の三韓征伐を冒頭におき、道鏡事件における和氣清麿の宇佐参詣、行教和尚、平時平等などに関する託宣説話などであるが、正史に記されたものと全く異なった、中世ふうの奇怪な物語性に富む。

28（八幡宮縁起） 一軸

文正元（一四六六）年写。冒頭（約四百五十字）および中間（約千二百字および図一図）欠落。現存九図。奥書に「奉寄附／大日本国周防国吉敷郡□□□（貼紙「吉敷郡秋穂郷」）／今八幡大菩薩御宝殿者也施主心中／求願一々皆令満足故也／干時文正元年丙辰十二月二日施主敬白」とある。本文は享祿四年（一五三一）絵巻（『神道物語集』所収）と同類。記事の出入や順序の異同はない。絵の位置もほぼ同じである。

29 八幡大菩薩御縁起 二軸

承応二（一六五三）年写。上巻六図、下巻四図。奥書に「承応貳年巳九月吉祥日／頼尊写早／大安寺村市兵衛」とある。箱に「八幡御縁記／大安寺縁記」とあり、もと大安寺縁起とともにあったものが、大安寺縁起は失われたもの。箱の表および底、各巻の袖に「坂井吉兵衛」と所蔵者の名を記す。本文は享禄四（一五三一）年絵巻の系統であるが、上巻に神功皇后に天照大神が憑き、託宣を下した記事を有し、下巻は記事の順序を異にするほか、一部に天正十八年宇佐八幡宮縁起（『神道物語集』に翻刻）と同文を有する。絵は極端に省略した形でかかれている。

30 八幡の御本地 三冊 東京大学国文学研究室蔵

承応二年山本長兵衛版。上十、中六、下七面の彩色（四色）絵入。本文は享禄四年絵巻の系統であるが、かなり頽れている。末尾に約百字の記事が追加されている。『室町時代物語集』第一に翻刻。八幡本地の版本はこれ一版である。同版は大谷大と京都大にある。なお、明治期の後刷がある。

31 布袋の栄花 二軸 東京大学国文学研究室蔵

布袋（唐代の禅僧、？―九一七）の風狂の生涯を画いた高僧伝。中型の絵巻。淡彩、上下巻各五図。各画面に「探幽正筆（印）」とある。狩野探幽（一六〇二―一六七四）の直筆か否かは不明であるが、漢画風の描法は狩野派のものとおぼしく、当館蔵『十六夜物語』と類似し、同系の工房で成ったかと思われる。本文は一部分に親本の錯簡をそのまま写した所があるが、現存諸本とも大差はない。『室町時代物語集』第四に青山容三氏蔵本が翻刻されている。絵の位置は同本とほぼ一致するが図柄は全く異なり、むしろ同集（戦後版）付載の三浦家蔵絵巻の写真を思わせる。（当館撮影済。紙焼E 916）

32 からいと 二冊

江戸時代前期写大型絵本。上六面、下六面の住吉派ふうの絵入。内容は戦前の国定教科書にもとられた有名な孝行譚。木曾義仲の家来手塚太郎の娘、唐糸の前は頼朝に仕えていたが、父の命により、主君の敵となった頼朝を刺そうとして失

敗、石牢へ幽閉される。唐糸の子、万寿姫は母を救おうと苦心の末、頼朝の前で舞った舞の褒賞として唐糸を許してもらい、郷里へ帰る。御伽草子二十三冊のひとつとして広く流布した。本文は版本の写しと思われ、絵柄も版本と類似。この本のように、鳥の子紙に金泥で下絵を描き、絵にも金銀を多く用いた豪華本を俗に「嫁入本」と称する。大名や富豪の娘が嫁入りの際、床の間の棚飾り用として持参したためである。

33. ほうみやう童子 三冊

江戸時代前期写大型奈良絵本。上七面、中八面、下六面の絵入。念仏功德説話。天竺ちやうろくに住む法明童子は、貧しい母を救うため進んで人買いに身を売る。そして檀毘梨長者の一子の身代りに大蛇の生贄に立つが、唱えた念仏の功德で救われ、親王の位に昇り、母と再会して大王となり、末は極樂往生をとげた。本文は天理図書館蔵「いけにえ物語」（『室町時代物語大成』第二に翻刻）および岩瀬文庫蔵奈良絵本（上中のみ存）に近く、やや誤字が多い。他に版本（寛文八年版が『室町時代物語集』第四に翻刻）が五種あり、古浄瑠璃の正本があるが、別文。

34. ひおけのさうし 二冊

江戸時代初期（寛永ごろ）写奈良絵横本。上四面、下三面、絵はやや佳品。妬婦譚の一種。翁が愛玩する火桶を姫がねたみ、留守中に割った。帰ってきた翁は教訓譚を種々語って姫をいましめる。引用された種々の説話が興味深い。本文は丹緑本（古典文庫『未刊中世小説』三に翻刻）とほぼ同じ。鴻山文庫旧蔵。同種の写本が米沢市立図書館（上のみ）にあり、かつて高野辰之氏、有馬秀雄氏らも所蔵して居られた。

35. しが物語 二冊 東京大学国文学研究室蔵

江戸時代初期写奈良絵横本。絵は細密にしてやや佳品。上六図、下二図。冷泉堀河中納言の姫君と大納言みちたかの子少将との悲恋物語。題名は物語後半の舞台近江国志賀（滋賀県滋賀郡）に因む。本文は久原氏住吉別邸旧蔵本（戦災焼失、古典文庫『室町時代物語』二に翻刻）とほぼ同じ。松本隆信博士が「某氏旧蔵」として紹介された二冊本に、より近い。

竜谷大に奈良絵本（下巻のみ）があるが、本文、絵ともやや異なる。（当館撮影済。紙焼E 893）

36 住吉本地 三冊 東京大学国文学研究室蔵

江戸時代前期写奈良絵本。もと十五図あったが現在は六図のみ存。本文も六丁分脱落。住吉神社（大阪市住吉区）の靈驗説話集。本地とは通例神仏の前生物語をいうが、縁起譚や靈驗記の類を呼称することもある。本書の他の伝本には慶応大（横山重氏旧蔵）に三冊の写本（未完成品か）。『室町時代物語集』第五に翻刻）が知られる。『未刊中世小説解題』『室町時代物語集』第五解題参照。（当館撮影済、紙焼E 894）

37 文正草子 三冊 東京大学国文学研究室蔵

鹿島地方に伝わる塩作りの栄達伝説を材とし、富貴長者と立身出世という室町時代の衆庶の夢をよく描く御伽草子。祝儀性の濃い物語で、享受者に尊ばれ、従って伝本も多いし、いわゆる御伽草子二十三編の目録の第一番目に配された栄誉を担う。上六図、中下各四図。本文は寛永頃刊の丹緑本系統のものだが、下巻末尾は他本に比して独自で、「御い^{（祝）}わるの^{（座敷）}さしきにては此さうしを^{（草子）}一はんに御らんして、さていつれのさうし成とも御よみあるへし」とあるが、江戸時代の風俗ともなった祝言の行事である正月の草子読み初めの状況と照らし合わせると興味ある。横形本で、もつともよく見られる奈良絵本である。江戸前期（寛文頃）のもの。（当館撮影済。紙焼E 874）

38 横笛草紙 二冊 東京大学国文学研究室蔵

奈良絵横本。『平家物語』巻十や『源平盛衰記』巻三十九の、斎藤滝口時頼とに仕える女房横笛との悲恋物語。いわゆる御伽草子二十三篇の一つ。本文は明暦四年刊本や渋川版と同じ。チェンバレン（王堂）旧蔵本。

39 大職冠^{たいしよくわん} 三冊 東京大学国文学研究室蔵

大職冠藤原鎌足の栄華を、興福寺本尊釈迦如来の眉間宝珠の由来譚を軸にして語る作品。室町時代の芸能である幸若舞曲の中で、本曲は上演回数が最も多く、当時人気のあったものと知られるが、その舞曲台本を読み物として享受されるよ

うに双紙化した、いわゆる舞の本の一つ。上中下各五図。江戸前期に流行した奈良絵横形本で、奈良絵本仕立は、御伽草子の物語類ばかりでなく、室町期以前の王朝の物語や、こうした幸若舞曲の作品にもよく見られる。なお、当該本には、後代の補修改装の時に、各巻冊の表紙と本文料紙とが交錯した現象が見られる。現行の題籤の〔上〕と〔中〕は互いに入れかわるべきものである。また、本物語と同材の作品に謡曲の「海士」、近松門左衛門の浄瑠璃がある。

40 しづか 奈良絵本貼付屏風一双

幸若舞曲「しづか」を読みものとして奈良絵横本にし、それを後人が屏風に仕立てたもの。各隻四段に横に貼り続けている。本文は貼り違いはあるが完存。絵は一部欠。奈良絵本は江戸時代初期の写。屏風に仕立てたのはさほど古くない。内容は義経の愛人静が京都で下女の密告で捕われ、鎌倉へ護送されて、産んだ義経の子は梶原の策謀で海へ投げ棄てられて殺されるなどの悲しみにあい、鶴岡八幡宮の社頭で「しづやしづ……」の朗詠をしながら夫義経をしのぶ舞をまう有名な話であるが、義経記の説話とはかなり異なる。本篇中に五戒とか源氏物語巻名の名寄せとか、伊勢物語の秘事（『伊勢物語難義注』に見える）などの挿話を入れているのが注目される。

第三 その他の貴重書から

41 松花和歌集 卷第四 一軸

元徳三年（一一三一）頃の成立で為世門の四天王の一人浄弁の撰かともされる本集は、当時の二条派の私撰集として注意されるが、従来は巻一（春）・五（恋上）の両巻と若干の断簡（計約一三〇首）しか知られていなかった。今回当館蔵として展観する新出巻四（冬部六六首）は、その意味で注目されよう。江戸期ながら恐らく祖本に忠実な書写。元来は冊子本であったかとも思われる。奥書・識語はないが、蔵書印によれば冷泉家旧蔵。

42 十六夜物語 上下 二帖

十六夜日記の一伝本。江戸時代写。小川寿一氏が昭和十四年に記された末尾の解説に言う通り、万治二年刊本に近く、字体の一致する部分も多いが、淡彩挿図九面を有する点で興味深い。万治版本にある四面の挿図は、いずれも類似の構図で本書に見え、今回展観する東大本「布袋の栄花」と色調・描法が近いのも注意される。但しそれらは元来現位置にあったのではなく、小川氏が下帖の脱葉を万治版本によって補写された時に、元来挿図を予定して白紙としてあった面に貼込まれたものである。上野氏旧蔵。

43 好色一代男 八巻一冊 井原西鶴著

刊記は「天和二戌年陽月中旬 大坂思案橋荒砥屋孫兵衛可心板」、一冊に改裝合綴。左端下の鼠害部分を除いて虫損汚損が全くなく、保存極めて良好であり、荒砥屋版中摺のもっとも早いもの。巻四の二十二丁が、二枚あること（複丁）、各巻最終丁の裏のすべてに、柱刻ならびに匡郭があること、他本に比して、字高・匡郭の寸法がやや大であること等、本書の特徴である。なかでも本文中、書体・字の大小、直斜等において、異和感がある部分の墨色がことなり、入木と想定されるが、これは他の刷ではうかがうことのできない現象で（中村幸彦博士は「試めし刷」「校正刷」といわれる）、本書の他に類例をみぬうぶさを証明するものである。

44 金毘羅船利正續 曲亭馬琴著 全八編

曲亭馬琴（一七六七—一八四八）が文政七（一八二四）年から天保二（一八三一）年にかけて、毎年ほぼ一編ずつ刊行した続きもの合巻である。毎頁にある挿絵は当時の浮世絵師、溪斎英泉の手になった。内容は中国小説『西遊記』を讃岐の金毘羅の利生譚につくりかえたものである。各編のはじめに付されている色刷絵入りの部分は各編を売出した時に収めてあった袋である。本来の表紙は黄色の厚紙である。

展示部分には「鈴木義三治」「牧之」と馬琴の友人鈴木牧之の名が見えている。